

---

# 愛染果実

冴島岐之

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

愛染果実

### 【著者名】

N1637D

冴島岐之

### 【あらすじ】

もし、私がもっと早く生まれてきただなら、彼は選んでくれただろうか。

出会わなければ良かつた、なんて思ったことはないけれど、それでも、もつと早く出会いたかったと、やつれりひとせ、ある。

「バカにしないで。私、もう一十歳よ？　お酒だつて煙草だつて問題ないし、自炊だつてできるもの。子供じやないのよ」

声を荒げて、私はそうこつた。酔つてこるものかもしれない、とどこかぼんやり思う。もちろんお酒ではない。

店に、夜に、彼に、だ。

薄暗い店内。聞こえるのは周りの客の声と静かな音楽。洋楽だ、聞いたことはないけれど、すこいくらいのものだろう。

カクテルが売りの、青いライトで照らし出される店内は、どうなく妖しくて、知的で、私はすぐに彼にぴったりの店だと思つた。

「それでも、僕が二十歳のとき、君は学生だよ。　小学生だ」

彼は笑つた。

ブランデーの入ったグラスを持つ。氷が溶ける音がした。

「そうだけど、今は違うでしょう？　少なくとも口っこくになんて見えないわよ」

私はそういうて横目で彼の、庄司ショウジさんの顔を盗み見た。また笑っている。参つたな、と小声で呟いた。聞こえないと思っているのか。

「おかしこよ、君」

「あなたの方がよっぽどおかしいわ。人には散々関係ないといってのけたくせに」

「だつてほり」

お決まりの科白に、私はもつもつとしゃべっている。

「聞きたくないわ。飽きたもの。芸がないわよ」

「うん……その通り、だけどね」

目だけで笑って、グラスに口付ける。それだけなのに、たったそれだけの動作なのに、私は庄司さんがするひとつひとつ動作にすっかり釘付けになってしまっている。

もしかしたらブランデーを飲むふりをして私の魂でも飲んでいるのかもしれない、なんて愚かな空想が頭を過ぎるほど。

「けど、本当にもつたいないよ」

彼はまたそういう。そしてあの笑みを口元に浮かべる。答えを遠ざけてしまう。

「いつそのこと塞いでしまいたい。何もいえなくなってしまえばいい。そうしたら私は臆することなく彼の隣でのんびり眠つていられるのに、と思ひ。

「それは、私が決めるのよ」

「……正論だね」

「私は、あなたがいいの。あなたじゃなきゃ黙田なのよ」

「……贊同しかねるなあ」

「知らないわ。私が決めるんだから」

私が決める。誰の隣にいたいかくらい、私だつて決められる。「お願いだから、イエスじゃなくてもいいから、認めてはくれないの?」

眉を寄せた、唇を突き出して、うつむきがちにそっぽやいた。子供っぽいからやめようと思つていたけれど、この人の強情さにはお手上げだ。

ほり、彼はやつぱり、笑うだけ。

「僕はもう、おじさんだよ。そりや、君みたいに若くて綺麗な子にいい寄られて、悪い気はしないけどね」

そんなやせしき、振りまかなくてもいいのに。  
息苦しくなつてしまつ。

「……私が」

視線を床に落とす。彼の茶色い革靴の光沢を追いかける。

「私が、若くなかったら、選んでくれた?」

沈黙。

カクテルを造る音。

誰かの声。

音楽。

氷が溶けた。

空気がふるえた。

彼はやつぱり、笑うだけ。

するい。そう思つてしまつのは、私が子供だからだひつか。

\* \* \*

「それで？ 俐仁、なんていつた？」

「何も。へやしへて、一万円札叩きつけて帰つてやつたわよ」

「へー」

授業中の学食には、数えるほどしか人がいない。今は二限が始まつたところだ。いつもは眞面目に教室で寝ているけれど、怒つているからかお腹が空いてしようがなかつた。

どうせ細やかな神経なんてない、私はひどいフラレ方をしたつてやけ食にするタイプだ、と思つ。

田の前であるずるとラーメンを食べる岡田を見ながら、私もそれにすれば良かつたかな、なんて今更なことを思つた。

「どうしたらいいのかしら……」

「うう」とため息をついた。

ぐるぐるとフォークを回してスパゲッティを巻きつけ、口に運ぶ。トマトソースの味。スパゲッティなんて一本も絡んじやいなかつた。

まるで庄司さんに相手にされない私みたいな感じだ、と思つ。なんて滑稽だつ。

「別に、どうもしなくていいだろ」

「なんですよ」

岡田はまたずるずるとラーメンを口へ運ぶ。

岡田 杰オカダ・スケルといひの男は、何をしていても無関心そうな表情をしている。それでもこゝして相談をすればきちんと答えてくれる。意外と律儀な奴、ところのが私が最近つけた評価。

「好きになるときには好きになるもんだり。どうにかするもんじゃねーし、できるもんでもない」

「やうだけど、」

もつと、大人になれたらいい。

いいかけて、言葉が続かずにため息をこぼした。

昨日の庄司さんは、やはり私を子供扱いしているとしか思えない。

「無理とか頑張るとか必要ないって、俺は思うけど」

「……うん」

それから岡田は、やつぱり興味がなさそうにラーメンを口へ運んでいる。私も巻きつけすぎたパスタを一度落とし、自分の口にあつ量に巻きなおして口へ運んだ。味が濃い。既に渴き始めていたそれは、パスタ同士で絡み合っていた。

私の頭の中みたいだ。

「あのね、」

ぐるぐるした頭の中で、私は適当な言葉を探す。岡田がわずかに顔をあげたのがわかつた。

「私は、せめて女として見てもらえればいいの。それだけでも充分なのよ。そう、だって、そういうじゃないじゃない。だから、せめてもう少しあって見てもらえるように、努力したいのよ」

「なあ」

「何?」

「例仁、おじさんだから、つていうんだが」

「ええ」

「それって結局、女として見てるってことじゃねーの? 年齢引っ張り出してくるなんとか」

「わう?」

「さあな、」

自分でいつたくせに、その無責任な返事はなんだ、そう思つて私は岡田を睨みつけた。

当の本人はラーメンに夢中で、どんぶりを持ち上げると、スープを飲み始めた。「くぐりと喉が鳴る音が聞こえて、それから「こ」とりと

テーブルにどんぶりが置かれた。

「でも」

顔をあげて私を見る岡田の顔は、にやりと不敵な笑みを浮かべていた。こいつが笑うなんて、珍しいこともあるものだ、と思つ。

「お前のことになると、不自然に話を逸らすんだ。あの人」

「……どうこういって？」

「こいつやってもいいけど……」

やつこいつは岡田はちりつと私の様子をうかがつているようだつた。

「何よ。明日のお昼飯でもおしゃればいいのかしら？」

面倒に思いながらもやつこいつと、岡田はまたにやりと笑つた。イイコトではなさそうだ、直感でそう思つ。

私は思わずぐっと身構える。

何をいおうとしているのか。庄司さんのことなら、それは思うけれど、内容によってはあまり聞きたくはないのも本音だ。悪い意味の方だったら立ち直れないかもしない、と思う。まあ、お昼くらいで済むなら、イイ、かも知れない。いや、やっぱりイヤだ。

私が構えている様子に、岡田は一層口角を上げた。冷や汗をかきそうだ。

「バイト、変わつて」

「えつ」

私は田をまるくし、素っ頓狂な声を上げてしまった。  
私の警戒は、一気に崩れ去る。バイトを、変わる？

「バイトって、家庭教師の？」

驚いて見つめる私から「そ」といつて視線を外し、岡田は煙草を取り出して、火をつけた。校内なのに、と思つ。ここは喫煙所じやない。

「相手は中坊だし、秀才くんて訳じやねーから。むしろ、バカだから」

「え、え？ あなた、彼女じゃないの？ その子」

「そ、でもいいの。今会いたくねーんだよ。頼む」

ふつと煙を吐くと、また岡田は笑つた。これは、何か企んでいるらしい。「どんな陰謀なのかしら？」と聞いてみたけれど、笑つて取り合ってくれるような気配はない。

「……わかつた。それはいつの話？」

「明日」

「何時？」

「えーと、五時から一時間くらー」

「それで」私は岡田の真似をして口元を歪める。手を伸ばして、彼の手許から煙草を奪つた。

たっぷり、煙を味わうと、アヒルのように細胞が煙を吸収している。一度肺にためてから、ふうっと勢いよく煙を吐き出した。少しだけ、岡田の顔が隠れた。

「何を教えてくれるのかしら？」

\*\*\*

いわれた通りの時間、いわれた通りの場所に来て、私は早くも後悔し始めた。そもそも私は教えることがあまり得意ではない。

「何からやうかしら」

「え、ええつと……」

ひとつ机に向かつて隣り同士に座りながら、その場はなんともいえない空氣に包み込まれていく。岡田の彼女は人見知りだったのか、とそのとき気付いた。

私も似たようなものだから、この空氣の壊し方を知らない。

「……いつも通りの順番でいいわよ」

「あ、じゃあ……す、数学で、お願ひします」

「わかった」

だんだんと小さくなつていく語尾に、思わず苦笑する。

関係ないけれど、この子は美人になりそうな顔をしているな、と思つた。

「あのう……」

「何かしら。どこかわからない？」

「い、いえっ！」

その子は思い切り首を左右に振つた。ひとつに結んだ髪の毛が後から追いかけるばさりと揺れる。そのあまりの勢いは、首がおかしくなるんじゃないかと思つほどだ。

「ちよ、落ち着いて。えっと……那智、ちやん？」

私が心配のあまり慌ててそう呼びかけると、その子はふっと動きを止めた。それからすぐに顔が真っ青に変わる。

「ちよ、大丈夫？」

「へ、ヘーキですぅ……」

虚ろな目で、那智ちゃんはそいつた。この子バカだわ、そう思つたけれど口に出さなかつたのは、呆れて声が出なかつたからだ。しばらく気持ち悪そうに那智ちゃんは下に向いていて、私は背中をそつとなでてあげた。

「す、すみません」

「いいわよ、別に。私も教えるのはあまり得意じゃないし、時間つ

「ふしになつてあゅうビニコーわ」

「えへへー」

那智ちやんはまだ顔色が悪そつたけれど、それでもにっこりと笑つた。この子は、笑顔がつくれる子なんだな、と思つた。

「あの、き、聞きたいことがあるんです」

「何?」

「岡やん、元氣ですか?」

那智ちやんは不安気な顔を私へ向ける。ああ、そうか。この子は恋をしているんだつた、と思つた。

「ええ、元氣よ。会つてないの?」

「いえ、会つてます。でも最近、何か考へてるみたいで」

「そう?」

「えへへ、元氣なういいんですね」

その時見えた那智ちやんの横顔は少しだけさみしそうで、ビーナスか庄司さんがいつも見せるあの笑顔に似ている、と思つた。

「バカね」

「え? あ、はい。私バカなんです。岡やんにもよくいわれて、」

「違うわ」

私はなんだかおかしくなつて、ゆるむ顔を隠すよつに右手をあてた。それでも田だけは那智ちゃんを見ていた。那智ちゃんも私を見て、きょとんと不思議そうな表情を浮かべている。

「違うの、バカは岡田よ。……ねえ、今日会いに行つてきなさい。さみしいならさみしこいつで、思つてゐることつたらいいのよ」

「くつ？」

私がそうこいつと、那智ちゃんは耳まで真っ赤に染めた。そのあまりに素直な反応がおかしくて、私はまた笑つた。

「で、でも、そうこいつのつて、子供っぽいとか、う、うざいとか、思」

「ありえないわ。だつて相手は岡田よ？」

いくつになつても、恋をしている人間が考へることは結構同じじやない、そう思つた。この子は、少しばかり素直すぎるけれど。

「年上つて、那智ちゃんが思つてゐるよつもずつと子供っぽいものよ

十年二十年と歳月をかけて、私たちが大人になれたかといえばそれはノーダ。

昔の自分が何を見て何を思つていたのか、そんなことは覚えていないけれど、根本的な考え方なんかはちつとも変わつてはいないと思つ。

たとえばそれは友人関係とか、体裁とか、見栄とか、そういう外から見える自分にばかり敏感になつて、うまく偽る方法を見出した。

けれどそれは結局、自分の本質とはなんら関係ないのだ。

「そうよね、そういうものよね」

「何が、ですか？」

「なんでもないわ」

微笑を浮かべて、軽く首を傾げた。那智ちゃんもわかつていな  
ながら、同じように首を傾げてにこりと笑つた。

「私も、バカよねえ」

「……そつなんですか？ 仲間ですねつ」

不思議そつな顔をしたかと思つと、次の瞬間には満面の笑みを浮  
かべる。本当に、よく笑う子だ。

それから二人で勉強を再開したものの、口を開けば恋の話題へす  
りかわつていつた。

同姓を相手に、といつより岡田以外の人とこうした話をするのは  
随分久しぶりだと思う。昔からよく友人に『あの人どこがいいの  
？』といわれ続けてきた私は、次第にこうした話を苦手に思つよう  
になつた。

でも、岡田もそつだけれど、（相手がわからないこともひとつだ

が）否定しないでいてくれる。それが多分、嬉しかったのだと思つ。

気が付けば予定の一時間は過ぎ、外は暗闇の支配が増していた。

もし、私がもう少し早く生まれていたら、もう少し早く出会つていたら、庄司さんがもつと遅く生まれていたら、たとえば岡田と那智ちゃんのように、恋人になれる可能性はあったのだろうか。

今も、その可能性はあるだろうか。

「バカみたいだわ……」

私は、庄司さんが欲しい。手を伸ばせばいつでも届くくらい近くに、いつでもあの笑顔が見れる特等席に、私はいたい。

庄司さんのことを考えると、私は泣いてしまいたくなるのだ。見ているだけで幸せだと、勝手に相手とデートをするショミーレーションだと、そういうことで胸がときめくようなかわいらしい恋なんて、もうずっとしていいないな、と思つた。

私はそのまま、ひとりで飲みに行くことにした。久しぶりに、あのカフェバーへ向かう。庄司さんとよく行く店ではない。私が初めて彼と出会った店だ。

ひとりで行くのはかなり久しぶりだな、と思つた。

「おはよ、ケンちゃん」

オレンジ色の灯りで照らし出される店内、カフェバーというだけあって、学生の姿もちらほらと見える。今はまだ八時を少しまわったところだ。

白いストライプシャツに濃紺のパンツを身に付け、がっちらりしたたくましい背中に声をかけた。

「おひ、サツちゃんじやん！ 誰と来た？」

不思議そうな顔をして振り返ったケンちゃんは、私の顔を見るとにかつと笑つた。きれいに並んだ歯が見える。

私は思わず苦笑いを浮かべる。

「今日はピトリよ」

「え、めつずらじー！ なんかあつたの？」

真っ黒に日焼けした、見るからに体育会系のケンちゃん。バイトの制服を着ているせいか今はそれがわからないけれど、さわやかそうな笑顔は顯在だ。

見た目通りの好青年で、数少ない私の友達。

せわしなく動き回る人の中からケンちゃんを探すのは、いつだって簡単だ。無駄に身長が高いケンちゃんは、ヘタをすると頭二つ分飛び出している。

「どしたん？」

「別に。ただ来てみただけよ。相変わらず雑用なの？」

私が厭味っぽく見やると、ケンちゃんも苦笑いで「まいつたな」と頭を搔く。

ケンちゃんは顔がとりわけ良い訳ではないが、身長が高い分周りから視線を集めてしまつ。今も周りの喧騒が少しだけ遠い。すれ違う人と目が合つ。

「でもたまに中で作りせりせりたりしてる」

「たまに、ね」

「笑うなよ！」

手先が不器用なケンちゃんは、もう半年近くここでバイトをしているのに、未だカクテルひとつまともに作れないらしい。笑つては失礼だとしうけれど、込み上げてくるものには勝てず、私は口元に手を当てながらくすくすと肩をふるわせた。

「はあ、俺仕事あるから行くな。カウンター席来るんだったら後で俺の腕前見せてやる」

「あら、楽しみね」

「信じてないだろー。俺だつていつも失敗してるわけじゃ」

「失敗してるんじゃない」

「ああ、もういいー。じゃーなつ」

「またね、楽しみにしてるわ」

私はまた笑いそうになりながら、胸元でひらひらと手を振った。けれどケンちゃんはすぐには動き出さず、立ち止まって何かを思い出すように額に手を当てた。

「どうしたのよ」

「あの人」

「あの人？」

「そり、えつと……前にカジを送つてつたサラリーマン」

「ああ、庄司さんね」

突然出た名前に多少ドキリしながらも、至つて平然とした態度を装つて、私はかぐりと首を傾けた。

「来てるよ、つこわつき見かけたんだ。杰とかも、一緒だった」

「……そり」

喧騒が一気に遠のく。心臓が、一瞬止まつた気がした。  
冷静に振る舞うのはいつも、思つより難しい。

「ありがと、じゃあまたね」

「おう、飲みすぎんなよ」

「大丈夫よ」

そんなに子供じやないわ、そついつて笑つた。ケンちゃんもいつもみたいに笑つて、人の中に消えていった。

キツと前を見据える。『みんなにたくさんの人の中からだけど、探そう、そう思った。こんな偶然、めつたにない。』

自分の胸の鼓動にくらくらしながら、以前岡田と庄司さんがいた

一階へ急いだ。

登りながら何度もきょろきょろとフロアを見渡す。岡田はともかく、庄司さんの背は高い方だ。ケンちゃんと同じか、それ以上はある。大体がこの店にスーツで来る人は珍しいので、近くにいるならすぐに見つけられるはずだつた。

どこで見たかくらい、聞いておけばよかつた。自分の余裕のなさに、自嘲気味に笑つた。

「あ

「お

「ハーラダっ！」

「うわ、酒臭い！ ちょっと、離れなさいよ」

一階と二階の間、少し広い踊り場で立ち止まつていたら、急に後ろから誰かに抱きつかれた。大分酔つている。

「んー？ お前でかいなー、俺より高い？」

「岡田？ 酔つてるわね。っていうかでかいって何よ！」

私は必死になつてまわされた腕をほどいてもがく。私より細くて白い腕は、意外に力が強い。

「おーか、佐知江ちゃん困つてるつて

いつのまにやら一人の男性が隣に立つっていた。ひとりは岡田を離そうと手伝ってくれて、ひとりは笑いながら見てる。灯りは少な

かつたが、笑つているのはすぐに庄司さんだとわかつた。

「んー、やわらかい……」「

「ちよ、離しなむこつでばー。」

庄司さんを見て、私は更に必死になつて引き剥がそうとした。それを、やつぱり笑つて見ている庄司さんが、少しだけ腹立たしい。

「庄司さん！ 笑つてないで助けてください」

「岡あ、寝るなよ？」おい……って寝た？」

תְּנַשֵּׁן

「おーきーてーるー、うけーなー」

「どうちがよ、突き落とすわよ」

-  
h  
-

「那智ちゃん」に「うわよー！」

えー……別に？」

なんて厄介な人なんだろう！  
困り果てた私は、未だ引き剥がす  
のを手伝おうとしてくれる男性  
の姿を見た。  
確かに泉<sup>イズミ</sup>といった感じで、  
視線を向けていた。

「庄司さん、まだ笑ってるのね……」

「「めん」「めん。ほら、杰くん？　おいで」

そうこうして庄司さんが岡田の頭をポンポンと叩くと、「んー」と

いつでもおもしろいくらい、岡田は簡単に離れた。

酔つても、岡田は庄司さんのことだと素直に聞くのか。

「つーひと、眠い」

いい大人が、しかも男が、どこか甘えた声を出す。

「そう。泉、びっくり。」

私と変わらない身長の岡田が、庄司さんにもたれかかるよつて立つ姿は、妙に似合っていた。

一瞬、本気でそっちの趣味があつたらびしそよつとかと黙つてしまひ。

「とりあえず、岡は帰した方がよせやつですね」

「かえらなーーー」

「……あきれたわ、駄々つ子じやない」

解放されて少しほつとした私は、改めて見る岡田の姿に心底あきれたため息をもらした。

「なんか、イヤなことあつたみたいなんだ。今日のことをせめみてやつてね」

申し訳なさそうに謝る泉さんに、この人も大変なんだわと苦笑い。

なにがあつたのか、少しだけ氣になつた。

そういえば、岡田が相談とか弱音を吐く姿は見たことがない、と思つた。

「じゃあ、僕は送つてやるよ」

私がじつと岡田を見ていると、庄司さんが、ややぱり少し笑つて、そういった。

すかわざ隣にいた泉さんが「いや、俺が行きませう」と顔をあげる。

「やつへ。つてお前、彼女に会こに行くのか？」

「はは、敵にませんね」

\* \* \*

「じゃあ、一人で楽しんでください」

泉さんにやうこわれて店内に残されたから、もう三十分は経とうとしていた。

なぜか、お互に無言のまま。

理由はわからぬけれど、庄司さんが余り気分をよくしていいないことだけは、なんとなくだけれどすぐにわかつたし、そんな庄司さんの態度に私はいつも以上に緊張してしまって、氣の利いた台詞ひとつ浮かばなかつた。

「……杰が、ね」

「えつ」

突然話し掛けられ、私は目を大きく見開いた。怒られるような気がしていったから、びくりとふるえてしまう。庄司さんはそんな私の様子には気付いていないようで、どこでもないどこか、宙に視線を泳がせていた。  
「喧嘩したんだってさ、ちょっと前に」  
私を見ないで。

「……ああ、那智ちゃんね」

「そう。泉に誘われて会つてみたら、すでに飲んでたみたいでね。すぐにあの調子だよ」

ふつと身体全体の力を抜いたみたいに、庄司さんは笑った。男の人にはこんなことを思うのはおかしいのかもしれない。けれど、この人には色氣がある。大人の、というわけでは多分なくて、男性の。

「……疲れているの？」

庄司さんは少し驚いたように、目を開いた。それからやつと、私を見てくれた。

素直に大きく響いた、心音。

「少し、ね」

「なにかあったの？」

「大したことじゃないよ」

にこりと笑う、彼の顔から田が離せない。

やはりその表情はどこか疲れたよつて、こつもとは違うものだつた。

「……やつ」

私は女で、まだ学生で、きっと庄司さんの抱える苦労なんてわからぬことの方が多い。こんな私なんて、きっとものすごく頼りない。

さみしい。

でも多分、それがそのまま私と庄司さんの距離なのだろう。私はただ、受け入れることしかできない。

私も、笑つてみた。田が合つて、庄司さんもまた笑つてくれる。

息が止まるような、時間。

夜の闇へ、音は溶け出して消えてゆく。

何も聞こえなくなつて、見たくなくて、少し、かなしくなつた。わかりあえやしないんだわ。そう思った。

私がこの世に生まれ落ちた瞬間から、庄司さんが手の届く距離にいつもいてくれていたとしても、きっとわかりあえない。重要なのは多分、隣にいることじゃない。過ぎした時間の長さでも、ない。わかりあうことじやない。

少なくとも私にとって、庄司さんにとって、そんなことはこれまでぽつちも慰めにならない。

先程よりも素直にその影を見せる横顔を見ながら、一人思考をめぐらせた。

じゃあ、私にできることは?

「あ、電話」

庄司さんがちらりと私を見た。『氣を使つていいのだらう。胸ポケットに携帯電話を入れているらしく、少し困ったような顔を向けてくる。私の耳までは音が届かないが、庄司さんにはその音色が届いているようだ。

「気にしないで」

私はひらひらと顔の前で手を振つてみせる。

「ごめんね」といつて庄司さんは携帯電話を、本当に申し訳なさそうに取り出して、通話ボタンを押した。

立ち上がる様子はない。顔をそむける様子も。

それに少しだけ、安心してしまった私がいた。

あまり見ていては失礼だわ、と思い、自分のグラスに視線を戻した。ほんのり底が紫色をした、オレンジ色の液体が映る。そういうばケンちゃん、いるかしら。

私が座っているのも、一応、カウンター席のひとつだった。二階の階段近くに位置し、一階一階それぞれのフロアの中央にはもつと広い円形のカウンター席がある。あとは一階の奥の方にも、ここと似たような席があったはずだ。ケンちゃんはどうだろ？

私はまた、庄司さんの様子をつかがつた。話し中だ。その表情からはほとんど何もわからない。

庄司さんと一人だけのときは、決まってこいついう席に座る。ただ単に一人だからなのかもしれないけれど、この距離は好きだ。それは、庄司さんの横顔が好きだからなのだと思う。

いけない、とは思いつつ、会話に耳を傾けてしまう。

でもそれも、ほとんど粗づかを打つばかりで、内容などはほとんどわからない。

しばらくして庄司さんがシルバーの携帯電話を耳から離した。ストラップもなにもついていない、シンプルな携帯電話だ。

「「」ねんね」

「いいえ」

誰から？ と聞きそうになる私がいた。でも、私にそんなことを知る権限は、ない。プライベートまで踏み込むようなことはしたくない。

グラスで揺れていた液体を、一気に飲み干した。喉が熱い。ことん、と音を立てて、グラスを元のカウンターの上へ置いた。

「……帰るわね」

何を話しているか、わからなかつた。否、聞こえないフリをした。

《エリ、わかつたよ。その話はまた今度、しよう》

聞こえなかつたことに、したかつた。

もう、会つべきではないのかもしない。話をするべきではないのかもしない。

好きでいるべきでは、ないのかもしない。

「どうしたんだい？」

そういうて、私の顔を覗き込もうとする。私はただうつむいて、

首を左右に振るだけだった。声を出したら、泣いてしまってたから。

私は、あなたが瞬きするその一瞬にも、バカみたいに恋をしているのだ。

鼓動が早すぎて、頭が追いつかない。

「『めん、僕、何かしたかな?』

「いいえ、違うのよ。気にしないで」

「あ、やっぱり電話? 嫌ならいつてくれれば出なかつたの元々」

「違うの、本当。庄司さんのせいじゃないわ」

だって、私が好きなせいでから。右も左もわからなくなるくらいに、あなたを好きになってしまった、私のせいだから。

「今日はちょっと、疲れたのよ。元々、友達の様子見に来ただけなの。用は済んだから」

違う。本当は、記憶のあなたに漫かりたかっただけなの。私は、もつと簡単で、かわいい恋がしたい。それなのに。

「本当?」

「本当よ、」

口元だけで笑つて、必死に、何かに耐えるように必死に、私は顔を上げた。今は、泣けない。泣かないから。  
だからもう少しだけ、側にいる夢を見させてほしい。

「……送つていいくよ」

「大丈夫よ、そんなに遅い時間じゃないし、電車、あるもの」

「ほら、文句いわない。こういつときは黙つて送られとくもんだよ」

ね？ といつて、彼は笑つた。崩れそうに、なる。

想うだけで泣けそうなの。笑つてくれるだけで、時々、あなたを残して世界が終わるんじゃないかつて想うくらいに、他が見えなくなる。

「本当に、大丈夫だから」

いつもだつたら飛び跳ねるくらい嬉しい言葉。でも、それは庄司さんがやさしいから、きっと、女性になら誰にでもそういうのだわ。今までだつて、わかつていた。わかつていたの。わかつていても、嬉しかつたけれど。

「ねえ、本当に、どうしたんだい？」

「『めんなさい』」

泣かないで、お願いだからもう少しだけ、耐えて。  
慰められるのだけは、『めんな』のよ。

私はただ、席を立つた。早く、離れたかった。この場から。ぐらぐらと揺すぶられている私自身に、耐えられなかつたから。

「帰る、わ。今日は、会えて、よか……」

嘘、やつぱり、出会わなければよかつた。

あなたの特別になれないのなら、出会わなければよかつた。  
こんなことで泣いてしまう自分、私はあなたのことになると、こんなにも脆い。

「サチエ、ちやん？」

「「めんなさい、どうしたのかしら、私もめんなさい」、本当に、帰ります」

「待ってっ」

庄司さんが、行こうとする私の手を取った。痺れるみたいに、熱い。麻痺したみたいだった身体の感覚が、そこだけ異様に敏感になつていて。

それなら、私はどれだけ待てばいい？　あなたの心を手に入れるために。

「やつぱり、送るよ」

「いいのよ、放つておいて。私、大丈夫だか

「ダメだつてばー！」

突然の強い声、私を掴む手にも力がこもったのか、痛いくらい強い力で掴まれた。

庄司さんからぬ怒鳴り声に、私の涙も止まってしまう。

「ダメだつて、危ないよ。そんな無防備に」

恐る恐る庄司さんの顔を見ると、ぱつが悪そうにしょんぼりとした顔をしていた。いつも、そうだ。そつやつて私を期待させる。

「送るよ、家まで」

私と目が合いつと、庄司さんは少しだけ、哀しそうに、笑った。そんな気がした。

車内は、とても静かだった。エンジン音もほとんどしない車だから、余計に、沈黙がうるさかつた。置き去りにされた風の音が、耳鳴りのように響く。

さつき見た庄司さんの表情が、消えない。

居心地の悪いドライブ。私は今、誰よりも近い場所にいる。けれど、結局は物理的な距離でしかない。

苦しくなるくらいにいとおしい横顔も、今は見れない。

私は今、この場所から逃げ出したい。

庄司さんへの想いと同じように、逃げ出したいのだと、思う。だつてもう、苦しいから。

取り留めのない自問自答、何度も繰り返してきた。まったく相手にされてなくとも、何度も、私はあなたが好きだと、想つて、想い続けてみせた。あの日の返事だって、私は気にしていない。それでもあなたが良かつたから。

でも、それももう、終わりなのだと思つ。

結果が同じなのに、繰り返し繰り返し、変わらずに想い続けてくる意味は？

沈黙がつむれてい。

「何か、流しても、いい?」

「え、あ、ああ。いいよ、」

私はなるべく庄司さんを視界に入れないように下を向いて、ラジオのスイッチへ手を伸ばした。独特的のザーザーといつ音が現れる。それは気まずい沈黙をより一層強調させた。

適当に合わせると、流行りの曲が溢れ出した。バカみたいに明るいだけの、救いようのない音楽。それは、今の私たちにはなんとも不釣合いで、いつもは雑音に紛れて気にならないそれが、妙に白々しく響いてくる。

早く、帰りたい。

もう、疲れてしまったのだと思つ。不毛な片思いに。惨めになつていく私に、耐えられない。

誰か、教えて。

この想いの終わらせ方。

「それでは、本田はこの曲でしめましょう。ラジオネームにやんこさんからのリクエスト、曲名は――」

なんてことはない、ラブソング。ラジオから溢れるのはそんな曲ばかり。愛しい誰かのために歌う曲は決まってハッピーハンド。不安も苦痛もない。

誰も上手な恋の終わらせ方なんて、教えちゃくれない。

「ねえ、庄司さん……」

「なんだい」

胸が苦しい、息がつまる。

私はひとりで、恋をしてる。

いいことは、たくさんあった。

私を望まないのなら、これ以上やせこくしないでほしい。

「……わざも思つたけど、今日は元気、ないね」

そういうて運転したまま、私の頬に軽く指先で触れる。返事をしないでうつむいていると、彼の指は触れるか触れないか、その存在だけを感じさせて、私の視界を上昇して消えた。横に流している長い前髪が、かすかに揺れる。それから確かめるようにやさしく、ペたりとおでこに指が触れるのを感じた。血液が全部顔に集まつたみたいに、熱くなる。ぎゅっと目を閉じてみたが、確かに潤みだした瞳はもう、どう頑張つてもこまかしようがなかつた。涙腺は熱に弱くて、泣きたくないのに、涙腺は熱に弱くて。

「 つ、庄司、さん……」

声が、掠れた。喉に違和感を感じる。熱も。締め付けられたみたいに呼吸のままならない肺。泣きたくないのに熱ばかり集める田元。

やっぱり、私はあなたが好きなんだ。

「 なんだい？」

なんでもないことみたいに、彼の指は私の涙をすくつた。「ひらを見ている気配なんてまったくないのに、気付いていたようだ。まったく、なんて人なのだろう。これではまた、好きだと思つてしまつ。

離れていつた指先を思つて、私は頭の中で苦笑いをこぼした。

「私、もひ、セコヒ、す元ヒ、る、から、もひ、いわないから、だか、  
り……」

「……うん」

「こまからこいつこと、わすれても、いいから。いいから。もひ……  
あわ、ない……から、」

我慢しても我慢しても、込み上げるものに堪え切れず、はつきり  
聞こえたのかはわからない。

だけど私は、いいたくて、一言だけ、いいたくて。

これ以上、やせしわに触れたくない。

「……も、」

ようやく出した言葉は、自分でもわからないいくつこ掠れた空氣。  
秋に吹かれる落ち葉みたいな、活力の乏しいもの。  
ここを越えたなら、私も、変われるだらうか。

色付いて、舞い落ちる。

それだけじゃ終わらない、落ち葉みたい。この恋を、肥ませてしま。

して。

「はじめてあつた時から、ずっと……ずっと、」

すき、もう一度いおうとしたとき、車は急ブレーキ。私たち以外  
の車はほとんど走っていなかつた道路の脇に、止まつた。前につん  
のめつて、思わず涙も引っ込んでしまつ。

何が起つたのかしばらく私にはわからなくて、身体を座席に戻

しながら、ただ呆然としていた。

「……しょ、じさん？」

訳もわからず、名前を呼んでみる。やつあせであった熱は一気に冷めてしまっていた。

代わりに沈黙と重たい空気が戻ってくる。こや、Hンジンも切ってしまったようだったから、さつきよつむはるかに静かだ。

「「」ねん」

一瞬、言葉の意味が理解できなかつた。私に向けられているなんて思えないほど、一人よがりな響きを含んでいる声で、ハンドルを覆うように両手をつき、頭を乗せて背中を丸めている庄司さんが、いつもと同じ彼だと思えなかつた。

ああ、終わつたんだなあと、そのまま「」とを私はやつぱり、「」とかで拒否していたのかもしれない。

「、「」めん……」

ぱつり、やうこつた。

その声を聞きながら、あの日の私の言葉がどれほど意味のなかつたものかを思い知らされた。結局、今までいつてきた「」とはすべて、本気にもとられていなかつたのだ。

「」んなに沈み込んだ声は、今まで一度だつて聞いたことがない。

「つ、いいわ、氣にしてないもの。……驚かせて」「」めんなさい。私は、」「」

ハンドルに身体を預けたわしきの体勢のまま、庄司さんは少しだ

け顔を上げて私を見た。戸惑いの色が浮かんでいる。こんなときだけれど、あなたのそんな目を見るのは初めてだ、なんて感動してしまつ。

私はその動搖が氣付かれないよう、すぐに身体ごと逸らした。ドアに手をかける。開かない。そうだ、力ギがかつていた。思い直してロックを外そうと手を伸ばす。それに触れる前に、身体が後方に沈んだ。肩を強く引っ張られた私は、突然の力に抗うこともできないま、倒れる、そう思った。

「……」めん、本当に

耳元で聞こえる、いつもより低い声。空気が耳を、頬をかすめてくすぐつたい。

身体の前に回された腕は、思っていた通り、少し固い。

何を考えてるかなんてまつたくわからないけれど、庄司さんの腕の中にいるんだ、と認識したらやつぱり、幸せな気持ちになれてしまつた。

「……降りるわ」

「ダメだよ」

「もう、いいのよ。私、ひとりで帰れる。子供じゃないわ」

「でも、女だ。……そりでじょいっ？」

信じられないという顔で、私は顔を彼へ向けた。さつきよりずっと近くで、私を見ている彼の目を見つけた。彼はやつぱり、少し困ったように笑つた。

彼の腕がゆるんだ。そしてあの指が、私の頬をなでた。視線が

外せない。

骨張った指が、輪郭をなぞるように下へ降りる。その間も、私は彼の視線に応える。顎の先までなぞると、彼はふっと視線を落とした。手が、添えられた。唇を見られている、私は恥ずかしくなつて視線を落としてしまう。

それから、添えられた手に少しだけ力が入ったのがわかつた。彼の方に少し、引っ張られている。躊躇いながら目を閉じたのと、唇が触れたのはほぼ同時だった。

「……、あ、あの、」

「黙つて」

いつもより、少し低い声。確かめるように何度も、触れるだけの口付けを繰り返す。夢でも見てているんじやなかろうか、こんなの。だって、おかしい。

どこだかわからない道の途中で、明かりのない車の中を、度々追い抜かしていく乗用車のヘッドライトが照らしていく。

もう何度目かわからない。どれくらいそうしていたかも。私はこつそり目を開けた。顔が近い、そう思つてまた目を伏せると、額がくつつけられた。

「、『めん』

「……なによ、」

「ずっと、からかわれてるのかと思つてた。泣かせるつもりなんてなかつたのに」

「私、冗談でそんなこといえないわ」

「やうだよね」

そういうて笑って、また唇が触れる。その表情が、なんだかとても憎たらしくなってしまつて、「……ダイキライ」といつたら、瞳が哀しそうに揺れた。少し罪悪感を感じるけれど、でも。

「ずっと、信じてくれてなかつたのね？」

「やうだつたらいいな、とは思つてたよ」

「なによ、それ……」

「僕はもう、若くない。君みたいに、もう、華やかな未来なんて描けないし、それに、」

唇を耳元に寄せて、彼はささやく。

それは夢みたいに、くらくらくらくら、恥ずかしさから体中が火照るのがわかつた。

「 つ、庄司さんつー。」

「 なあに？」

楽しそうに笑つてゐるから、また言葉を失つ。本当は意地が悪いだけなのか、そう思つたけれど、いえない。

私が何もいえまま固まつてゐると、彼はくすりと笑つて、軽く頬を包むように指先を添え、つついた。

「泣かせたお詫び、しなきやね」

きよとんとしたまま、彼と田を合わせる。「このまま僕の家、行かないかい?」彼はにっこり笑って、確かにそうこった。心臓が一瞬、跳ね上がる。鼓動が身体中で、「うるさい」。

「や、聞きたいこと、ある、の」

「ん、いつひみて」

「あの人のこと、」

「あの人?」

「恋人、昔、忘れられないって、いつてたじやない……」

語尾が次第に弱くなる。自分で聞いておきながら泣きそうな私は、本当に、どうしようもない。

勢い任せでいったあの日の告白は、なんてことはない。ただ、私ならあなたを一番にするのにと思つたから。

確かに、あんな状況で告白するなんて、同情といわれても仕方なかつたかもしけない。

「……覚えてたの?」

「さつきの電話、なんんでしょ?」

「あ、ああ。そうだけど、」

「また、いわてるんじゃないの?」

どうして、素直に応えられないのか、私が望んでいたのに。  
といったそばから後悔してる。

庄司さんは、やつぱり、笑っていた。

「嫉妬？」

「な、なんでそういうのよ！」

「違うの？」

「 つ、もう、いいから答えて」

「僕だつたら嫉妬するなあ」

私が睨むと、彼は笑う。「そんなに心広くないんだよ」

「……そつよ、嫉妬してたのよ。バカみたいにね」

「よかつた」

彼はそれだけいつてまたひとつ笑った。

ハンドルを握る。エンジン音とわずかな振動。  
夜はまだ、長い。

= END =

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1637d/>

---

愛染果実

2010年12月21日09時55分発行